

中島待乳と幻燈

東京都写真美術館 学芸員

遠藤みゆき

中島待乳と幻燈

遠藤みゆき

はじめに

本論文では、写真師中島待乳 (c.1847-1938) 【図1】を中心に、我が国において写真師が、幻燈の普及と発展に対し果たした役割を検証することを目的としている。中島待乳は明治の早い時期から幻燈の製造を始め、我が国に幻燈 (マジック・ランタン) を広めた功労者の一人として知られる。彼は写真師として、浅草の吾妻橋畔に写真館を開業、のちに日本橋呉服町に移転した。それぞれの写真館の住所が印字された写真も現在に残る。

17世紀に西洋で発明されたマジック・ランタンは、日本においては江戸後期に渡来、既存の影絵文化と融合し、日本独自の投影技術として普及したといわれている^❶。現存する最も古い資料では、安永8 (1779) 年に大阪で刊行された『席上てづま 珍術天狗通』に、マジック・ランタンを指すであろう「影絵目鏡」なるものが紹介された。『天狗通』の紹介によれば、この頃すでに「影絵目鏡屋」にて販売がなされており、実際の渡来は、安永8年より随分前であったと推測される。江戸における同様の記録としては、『天狗通』の刊行から20年近く経った享和元 (1801) 年、のちの都屋都楽が上野山下にて、阿蘭陀エキマンの見世物を見、自ら改良をほどこし、享和3 (1803) 年から牛込神楽坂にて「写し絵」の興行をおこなったと、『名人忌辰録』に記されている^❷。

重い鉄製のマジック・ランタンとは異なり、木材で作られた写し絵の風呂は軽く、持ち運びが簡易であった。そのような特性を生かし、風呂を抱えた複数の演者が、スクリーン裏から油皿にともした明かりにより投影をおこなうという、独自の投影・上演形態が生まれたという^❸。

こうした写し絵の伝統も残る明治の初年、のちの教育博物館館長の手島精一が、マジック・ランタンを海外から持ち帰り、教育・啓蒙の手段として改めてその効用を説き、中島待乳と鶴淵初蔵に幻燈の製造を依頼した^❹。鶴淵は、写真師でもあり、幻燈から活動写真、印刷業まで、手広く商売をおこなった人物として知られている。文部省や教育博物館により、教育や啓蒙の手段として用いられた幻燈は、同時に、既存の写し絵文化と結びついた娯楽的方面へも広がっていった。その後、戦中・戦後も楽しまれた幻燈は、技術の発達と



図1 中島待乳

「初期の写真師たち」『アサヒカメラ』
(45巻5号、1960年5月) 104-105頁

- ❶ 西洋幻燈の日本への渡来・受容史については、以下に多くを負った。岩本憲見『幻燈の世紀』(森話社、2002年)、草原真知子『幻燈から紙芝居へ—大衆の映像メディアと戦争』乾淑子編『戦争のある暮らし』(水声社、2008年)、大久保遼『映像のアルケオロジー—視覚理論・光学メディア・映像文化』(青弓社、2015年)など。
- ❷ 平瀬輔世『席上てづま 珍術天狗通』(環翠堂、1779年)。
- ❸ 関根只誠『名人忌辰録』(六合館、1894年)。
- ❹ 小林源次郎『うつしゑ』(私家版、1967年)、『うつしゑ追補』(私家版、1975年)、『写し絵』(中央大学出版部、1987年)。
- ❺ 石井研堂『教育幻燈の始』『明治文化全集 別巻明治事物起源』(日本評論社、1969年) 480-481頁。手島精一が幻燈を海外から持ち帰った年については、『明治事物起源』に書かれた年が誤りであることが指摘されており(中川望「教育博物館による幻燈の普及」『映画学』第23号 [映画学研究会、2009年] 79-87頁参照)、明治7 (1874) 年と10 (1877) 年の二つの説がある。前者、明治7年については、明治3年からフィラデルフィアに留学中の手島が、明治5年岩倉使節団として渡米中の大蔵省関係の理事官から通訳を依頼され、そのままロンドンへ随行、明治7年に帰国したとの記録が残る。後者については、明治9年に開催されたアメリカ独立記念大博覧会(フィラデルフィア)のため、文部省田中不磨の随行員として渡米、明治10年帰国、との記録を指す。手島精一の履歴については以下の資料を参照。『手島精一先生伝』(手島工業教育資金団、1929年)、『手島精一伝：工業教育の慈父』(化学工業技術同友会、1962年)、三好信浩『手島精一と日本工業教育発達史—産業教育人物史研究 I』(風間書房、1999年)など。
- ❻ 鶴淵初蔵については、以下に詳しい。中川望「鶴淵初蔵とその仕事」『映画学』第21号 [映画学研究会、2007年] 39-50頁。
- ❼ 昭和期の幻燈については、鷲谷氏の論文に詳しい。鷲谷花『「生活芸術」としての幻燈：東大川崎セツルメントによる幻燈創作活動を中心に』『映像学』第90号 (日本映像学会、2013年) 5-26頁、「戦後労働運動のメディアとしての幻燈：日鋼室蘭争議における運用を中心に」『演劇研究』第36号 (早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2012年) 81-91頁、など。

- ❖8 牧野守編「第三期 活動写真の草創期」第二巻（『日本映画論言説体系』第22巻、ゆまに書房、2006年）、碓井みちこ「写し絵とその観衆」『日本映画叢書④ 観客へのアプローチ』（藤木秀朗編、森話社、2011年）、上田学「日本映画草創期の興行と観客：東京と京都を中心に」（早稲田大学出版部、2012年）、入江良郎「吉澤商店主・河浦謙一の足跡（1）吉澤商店の誕生」『東京国立近代美術館研究紀要』第18号（東京国立近代美術館、2014年）32-63頁、『映画生誕100年博覧会：シネマの世紀』（川崎市市民ミュージアム、1995年）、「ニッポンの映像一写し絵・活動写真・弁士一展」（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2008年）などを参照。
- ❖9 木下直之「写真画論 写真と絵画の結婚」（岩波書店、1996年）、佐藤守弘「トポグラフィの日本近代」（青弓社、2011年）など。また、当館学芸員石田哲朗氏の論文も参照のこと。石田哲朗「高木庭次郎の幻燈写真—収蔵作品『日本風景風俗100選』について」『東京都写真美術館紀要』No.14（東京都写真美術館、2015年）97-112頁。
- ❖10 横浜写真については、以下を参照。斎藤多喜夫「幕末明治 横浜写真館物語」（吉川弘文館、2004年）、「彩色写真と横浜」『横浜写真の世界』横浜開港資料館編【増補】彩色アルバム 明治の日本《横浜写真》の世界（有隣堂、2003年）。金子隆一「『横浜写真』の位置」『非文字資料研究』第3号（神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議、2004年）。
- ❖11 梅本貞雄「日本写真界の物故功労者顕彰録」（日本写真協会、1952年）。〔再録：『夜明けまえ知られざる日本写真開拓史Ⅰ・関東編研究報告』〔東京都写真美術館、2007年〕〕。
- ❖12 井根直美、トーリン・ボイド『セピア色の肖像—幕末明治名刺判写真コレクション』（朝日ソノラマ、2000年）158-159頁。
- ❖13 「文書類纂」の存在は、金子一夫教授にご教示いただいた。金子教授が書かれた下記論文にも、「文書類纂」に記載された待乳の履歴が簡潔にまとめられており、さらにご遺族への丹念な調査もおこなわれている。特記すべきは、秋尾園の末弟であり写真師でもあった秋尾新六が、在家日蓮宗教団「浄風会」を設立し、中島待乳の弟子や親族の多くが、秋尾新六の宗教上の弟子であったという指摘である。宗教上のつながりからも、今後、待乳らによる写真館経営の実態を探る必要があるだろう。本論は金子教授の多大なるご協力と真摯な調査のうえに成立していることをここに明記し、感謝の意をあらわす。金子一夫「秋尾園と工部美術学校」『近代画説』第24号（明治美術学会、2015年）4-33頁。
- ❖14 梅本「顕彰録」では、生まれが嘉永3（1850）年とされており、「セピア色の肖像」もこれに倣い嘉永3年とする。「文書類纂」には、嘉永6（1853）年4月14日と書かれている。「墓碑銘」には生年が記されていないが、昭和13（1938）年1月19日に91歳で亡くなった（「[広告] 中島精一 [中島待乳]」『東京朝日新聞』朝刊、4頁、等新聞記事を参照）ことから、単純に計算すれば、生年は嘉永元（1847）年頃となる。

ともに、今や忘れ去られた存在となったといえるだろう。

本研究は、幻燈を単純に回顧し再評価するのではなく、写真師たち・写真の歴史とのかかわりから、再度歴史的に捉え直すことを目的とする。先行研究においては、多くの場合、幻燈は映画前史を形成する光学機器・投影装置の一形態として位置づけられているものの、写真機と幻燈機の構造的な近さを考えれば、写真史研究においても幻燈が研究対象となることは、自然なことであるだろう。

近年では、写真史研究においても、他の隣接するメディアとの比較考察がなされ、写真の歴史だけを論ずるのではない、幅広くメディアやイメージを捉えようとする、写真史研究の成果が生み出されている。作家論や作品論に終始することはできない、日常的に生みだされる写真や、いわゆる横浜写真のような土産物としての写真と同様に、幻燈とは、芸術的な作品というよりも、市井の人々に楽しまれ、消費された商品であった。それゆえに、写真を芸術作品として評価してゆく、美術史的な観点に基づく研究、作品・作家論として論じられる写真史研究からは、見過ごされてきたのではないだろうか。

以上をふまえ、本論文では、明治中期に活躍した写真師であり、かつ幻燈製造者でもあった、中島待乳に焦点を当てる。中島待乳という写真師の経歴を追い、彼の活動から、当時の写真界における幻燈の受容と広がり、を、考察してゆく。第1章では、待乳の履歴を再検証し、写真や幻燈を手掛けるようになった背景を明らかにする。第2章では、幻燈製造の具体的な状況について、教育博物館との関係を示し論じる。第3章では、上記の文献調査をふまえ、現存する資料についての調査報告をおこなう。最後に、待乳と写真師たちによる「日本幻燈会」の結成と、その後の写真界における幻燈の盛衰、および待乳の功績を振り返り、結びとしたい。

1. 中島待乳の経歴

中島待乳の経歴は、梅本貞雄『日本写真界の物故功労者顕彰録』、日本カメラ博物館監修『セピア色の肖像』などに掲載されており、これら二点は、東京都公文書館に保存される『文書類纂 褒賞』（明治45年・大正元年）掲載の履歴を基にしていると考えられる。『文書類纂 褒賞』内、「第一種褒賞」と題された目次の10項目目に、中島精一の名をみつけることができる。精一は待乳の本名であり、待乳の経歴は「東京府」「警察廳」「東京市日本橋区役所」等の機関名が印字された原稿用紙に、それぞれ記されている。本稿ではそのうち「東京市日本橋区役所」と印字のある原稿用紙に書かれた、二種類の経歴書のうちの一点を（内容は全く同じである）翻刻し、【資料1】として掲載した。

また、多磨霊園内中島家の墓に建てられた墓碑銘「中島翁紀功碑」【図2】【図3】についても翻刻をおこなった【資料2】。両翻刻は、本論文の巻末に掲載している。これら二点の資料を基に、以下に中島待乳の経歴を示す。

中島待乳（本名・精一）は、嘉永元（1847）年頃、千葉県銚子に

生まれた。文久年間(1861-64)にオランダ船が漂着した際に、乗組員が持つ懐中時計に貼り込まれた写真を見、絵画と勘違いし、その技巧に驚嘆し画家を志した。¹⁵ 元治元(1864)年、待乳を商人にさせたいと考えた父は、丁稚奉公をさせるために待乳を連れ江戸に出るも、画家を志す待乳の決意は固く、父は息子を連れ千葉に戻った。慶應3(1867)年、南画家中林湘雲が銚子に来た際に、待乳は請願し弟子となる。同年湘雲に連れられ江戸に出、絵画の研究に専心した。

絵画を学ぶ中、オランダ船の乗組員から見せられた懐中時計の絵が、絵画ではなく写真であることを知り、写真術の研究を志すようになる。写真術の習得を目指すものの、師を見つけることに苦心した待乳は、日本橋町の瑞穂屋清水卯三郎のもとに漢訳の写真書があることを知り、融通してもらった。さらに清水から福地源一郎を紹介され、福地に漢訳写真書を翻訳してもらい、また福地に師事することで写真術に必要なレンズ製造法について知り、京橋竹川町の玉屋松五郎に就いてレンズの研磨術を学んだ。この頃、写真を撮影してほしいという注文はほとんどなく、待乳は自ら製造した写真機の試験撮影を吉原でおこなっていたという。

明治戊辰の頃(1868-69)、ようやく写真師に就いて学んだとされる。¹⁶ 修正術を習得し、採光法をよく研究した。明治5(1872)年には、京橋竹川町の玉屋に身を寄せ、レンズや写真機の製造、写真撮影をおこなっていたものの、同年大火に遭い、玉屋とともに芝区日蔭町に移転した。明治6年に玉屋が亡くなり、待乳は明治7(1874)年に浅草吾妻橋畔材木町に写真館を開業した。明治10(1877)年の西南戦争により顧客が増え、写真館は繁盛したという。同年8月21日から上野にて第一回内国勸業博覧会が開催されると、待乳は人物像を写した写真を出品、花紋賞牌を受けた。¹⁷

そのような中、明治11(1878)年、大蔵省印刷局はオーストリア人の写真師シュティルフリート(Baron von Stillfried, 1839-1911)を防贋技術指導のために雇い、さらに一般の撮影依頼に応じるようになった。¹⁸ 印刷局の撮影料が安価であったため、東京の写真師の中には破産する者まで現れたという。待乳はこの時期、幻燈機の製造に着手し、ほかの営業写真館が営業停止に陥るような苦難の時期を乗り越えたのだと、『文書類纂』には記されている。待乳自身は、幻燈製造に着手した頃を次のように語った。

尚脱影夜話には魔燈即今云ふ幻燈のことも書いてありました。又其れに用ふる光源には、石油燈は暗い故酸水素吹管を用ひて石灰棒を焼くと云ふ様なことまでも載せてありました。自分は又これに付て研究をして、幻燈版の製造幻燈器械の制作をやりました、当時の手品師正一にもたのまれて、作ったことがあります、其後引続き幻燈器械及映画の制作に力を用ひ折柄、時の文部省は教育普及の御旨趣により、幻燈器を利用なされ、其製造方を申付けられました、上納後に到り各地の教育家又は郡村役所等より、文部省御用幻燈製造者の名宛て以て、直接の注文を受けるようになりました。これは丁度明治十年頃のことです。¹⁹



図2 中島家の墓、多磨霊園(執筆者撮影)



図3 墓碑銘、多磨霊園(執筆者撮影)

❖15 墓碑銘では、文久2(1862)年待乳13歳のとき、外泊所にて「照像」を見、その精巧さに驚き、写真術研究を志したとされる。

❖16 「墓碑銘」の記述による。ここでいう写真師とは、横山松三郎のことか。『文書類纂』および『顕彰録』には写真師に就いて学んだという記述はない。「セピア色の肖像」には、横山の名が記されている。「待乳」という号は、横山が待乳山にちなんで名付けたとの逸話が残るものの、待乳が横山の元で、いつ頃・どのように写真術を学んだのか、確かな記録を見つけることは現時点ではできていない。しかしながら、横山の逝去に際し、弟子たちの連名の中に待乳の名を見つけることができるため、弟子筋であることは間違いないと考えられる。富坂賢、柏木智雄、岡塚章子編『通天楼日記：横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷』(思文閣出版、2014年)等を参照。

❖17 「明治十年内国勸業博覧会審査評語下」(内国勸業博覧会事務局、1878年)。

❖18 シュティルフリートは明治12(1879)年4月に印刷局を退職した。明治19(1886)年10月にいたり、印刷局は局外者の写真撮影事業を廃止した。印刷局における写真事業については以下の文献を参照。『内閣印刷局七十年史』(内閣印刷局、1943年)166-169頁、大蔵省印刷局編『大蔵省印刷局百年史』(印刷局朝陽会、1972年)第1巻(474-478頁)、第2巻(420-421頁)。『大蔵省印刷局一写真でみる100年のあゆみ一』(大蔵省印刷局、1972年)30頁、復刻印刷局沿革録(2)明治四十年発行(印刷局朝陽会、1977年)、刑部芳則「まぼろしの大蔵省印刷局肖像写真一明治天皇への献上写真を中心に一」『中央大学大学院研究年報 文学研究科篇』第38号(中央大学大学院研究年報編集委員会、2009年)1019-1039頁、など。

❖19 「中島待乳氏の経歴談」(青木茂編『明治洋画史料懐想篇』中央公論美術出版、1985年)163-174頁(初出：『日本写真学会会報』第7・9号[1909年5・7月号])。

『脱影夜話』は明治7(1874)年、北庭筑波と深沢要橘により、日本初の写真雑誌として刊行された。待乳は『脱影夜話』に掲載されていた記事から、幻燈の製造を試み、その後に文部省により幻燈製造を依頼されるようになったようだ。幻燈製造については、次章で詳述することとする。

待乳はその後、写真師として数々の賞を受け、写真界における種々の役職を歴任した。明治14(1881)年に開催された第二回内国勸業博覧会では、第2区「製造品」内に出品した写真により有功三等賞牌を受けた。^{❖20}明治23(1890)年の第三回内国勸業博覧会では、待乳は第1部「工業」に写真を出品するとともに、第5部「教育及学芸」に出品した「幻燈及映画」により、有功三等賞牌を受けた。^{❖21}さらに、明治27(1894)年には日本橋区呉服町一番地に移転し、同年大日本写真品評会評議員を務めた。明治40(1907)年に大日本写真会が設立された際には評議員となり、同年の東京勸業博覧会では丸木利陽、小川一真とともに、「写真印画、同器械材料」という区分に対し嘱託審査官に任命された。^{❖22}

以上は主に、中島待乳の写真師としての功績であるが、彼は同時に幻燈製造に力を入れ、日本における幻燈の普及に多大なる貢献をした人物として知られている。次章では、待乳による幻燈製造の状況を、文献資料の調査から可能な限り具体的に、明らかにしてゆく。幻燈普及の背景には教育博物館の存在が大きく、待乳にとっても後ろ盾となっていたが、自らの技術と工夫により徐々に事業を確立させていったことがわかるだろう。

2. 教育博物館時代

石井研堂『明治事物起源』の「教育幻燈の始」という項目には、中島待乳の名が次のように現れる。

十三年に至り、文部省にては、各府県の師範学校へ、奨励品といふ名にて、頒与せんとしたりしが、いちいちこれを外国より輸入せんよりは、これを内地にて製造するの至便なるがために、当時写真業者中、理化学の新智識ある鶴淵初蔵、中島真乳[ママ]の兩人に、その模造を謀りたり。兩人、少なからぬ失敗と研究を重ね、やうやく成功して、これを上納せしは、同年八月(?) [ママ]のことなりとす。これより兩人は、文部省の命あるごとに、これを製造上納し、文部省はこれを地方の師範学校に頒与せしが、^{❖23}同十六年に至り、同省経費の欠乏により、このことやめり。

❖20 『第二回内国勸業博覧会褒章授与人名表』(内国勸業博覧会事務局、1881年)。「第二回(明治十四年)内国勸業博覧会審査評語 上」(内国勸業博覧会事務局、1882年)。

❖21 『第三回内国勸業博覧会出品目録』(内国勸業博覧会事務局、1890年)。「第三回内国勸業博覧会褒章授与人名録」(第三回内国勸業博覧会事務局、1890年)。

❖22 『東京勸業博覧会審査報告 卷壹』(東京府庁、1908年)。

❖23 石井研堂「教育幻燈の始」(同前)。

❖24 しかしながら現時点では、文部省から発行された年報等公文書の中に、待乳や鶴淵に幻燈製造が委託されたという記述は確認できていない。

待乳は『脱影夜話』をもとに、幻燈機・幻燈種板の製造を明治10(1877)年頃から試みていた。その後、明治13(1880)年になると、文部省から直々に、待乳や鶴淵に対し幻燈製造のご用命が下されたという。^{❖24}文部省では、師範学校等における教授の手段として幻燈の導入を推進し、その中心となったのはのちの教育博物館館長・手嶋

精一であった。教育博物館自体は、第一回内国勸業博覧会が開催された明治10年に、上野公園内に開館した。博物館の収集・展示品は、第一に教育用具類、第二に博物標本であり、模造や普及のため、展示品の貸与もおこなった。²⁵

待乳や鶴淵が幻燈製造の依頼を受けた年、明治13年の年報には、「本館新調物品表」という項目のうち、「幻燈及映画」の欄に「十四」と数字が記されている。この資料から明治13年に教育博物館は、待乳や鶴淵に幻燈機と種板を計14セット製造させ、買い上げたのだと推測される。しかしながら同様の表は、以降の年報には継続的に掲載されていないため、幻燈機および種板の増加数の推移を追うことは、現時点ではできていない。

さらに、明治13年頃の教育博物館と待乳の関係については、洋画家・平木政次による回想録からも、うかがうことができる。

十三年の二月木村静山君が、教育博物館の兼務を止め、大学の専任となったので、その後任に私が進められて、博物画に無経験でしたが、この旅行の写生画を見画して、首尾能く御採用となった訳です。(…) 任命は二月十三日でした。(…)

又或る時、天体や生理に関する幻燈の映画を作ることを命ぜられて、暗室の設備もないので倉庫の窓を閉ざして、暗室に代へました。着色の絵具は、透明色の二三種に過ぎず、なかへ骨が折れました。それから当時の館長が、渡欧の際絵具を招来されたので、やうやく完成の着色が出来たと云ふ様な訳です。映画の作製は、写真師中嶋待乳に頼んだ。月日を失念しましたが、或る夏、皇后陛下新宿御苑へ御台臨の際この映画を展覧に供し奉り御説明は、館長手島精一先生、幻燈器械の使用者は吏員の直村氏でした。(…) 此の一個の器械を模造して、文部省から全国の小学校へ奨励品として寄贈されたことがあります。この器械は石油を使用して、甚だ簡単なものでした。²⁷

平木は明治13年2月から教育博物館にて画工として働き始めており、その後教育博物館において、待乳が制作した種板に、平木が彩色をおこなう、というかたちで二人が協働した時期があったのだと想像できる。同年、待乳は秋尾園と結婚したという。²⁸ 園は工部美術学校の一期生として入学し、数少ない女子学生として、西洋の画法を身に付けた女流画家であり、このうち待乳を幻燈下図の作成や彩色などにより助けることとなった。²⁹

教育博物館に雇われ、文部省お抱えの幻燈製造者として仕事を受けていた待乳ではあるが、経費欠乏のため、教育博物館は明治16(1883)年に、幻燈を配布式から貸出式へ移行したと、『明治事物起源』には記されている。同時に、待乳や鶴淵への制作の依頼も中止されたという。³⁰

しかしながら、明治18(1885)年の『文部省第十三年報附録(明治十八年分)』に掲載された「東京教育博物館年報」内、「教育用具類 員数及代価表」という項目では、「教育家参考具」に含まれる「幻燈及映画」の欄に、「増数」、つまり去年度より増加した数

❖25 教育博物館から明治13(1880)年に出された「文部省年報」内、「教育博物館第四年報」では、「規則改正ノ件」という項目の中で、新たに博物館の所蔵する物品の貸出規定を設けたことが記されている。「規則改正ノ件」『教育博物館第四年報 明治十三年』(文部省、出版年不明) 501頁。

❖26 「本館新調物品表」『教育博物館第四年報 明治十三年』(文部省、出版年不明) 505頁。

❖27 平木政次「教育博物館へ勤むる」『明治洋画壇回顧』(日本エッチング研究所出版部、1936年) 87-88頁。

❖28 井桜直美、トーリン・ボイド「セピア色の肖像—幕末明治名刺判写真コレクション」(同前)。

❖29 秋尾園の経歴や工部美術学校での美術教育については、次に詳しい。金子一夫「工部美術学校女子生徒秋尾園資料の研究」『鹿島美術財団年報』第25号別冊(鹿島美術財団、2008年) 369-377頁、「秋尾園と工部美術学校」(同前)。

❖30 石井研堂「教育幻燈の始」(同前)。

❖31 「教育用具類 員数及代価表」『東京教育博物館年報』(文部省第十三年報附録(明治十八年分)) (文部省、1885年) 406頁。

- ❖32 「会社及内外人 納付物品図書表」〔東京教育博物館年報〕〔文部省第十三年報附録（明治十八年分）〕（文部省、1885年）411頁。

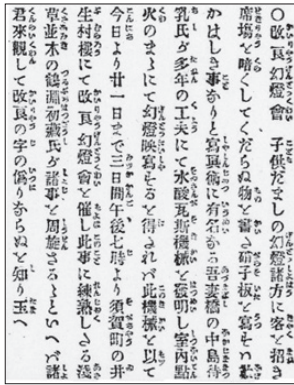


図4

- ❖33 「改良幻燈會」『読売新聞』（明治19〔1886〕年6月19日、朝刊）2頁。



図5

- ❖34 「幻燈映畫大改良」『大阪朝日新聞』（明治21〔1888〕年4月8日、朝刊）3頁。

- ❖35 当時の新聞・雑誌広告等において、幻燈種板を「映画」と表記する例が散見される。ルビが振られているものは少なく、「うつしえ」と「えいが」の二種類の読みが想定される。かつての写し絵の伝統を想起させる場合は「うつしえ」と、写し絵から切り離した新たな文明の響きを伝える場合は「えいが」と読ませたのだろうか。「えいが」という言葉の誕生にもかかわる、興味深い問題である。

が「三二」と記され、さらに同年報の「会社及内外人 納付物品図書表」内には、「幻燈及映画三十三個 中島精一」と記されている。この記録に従うならば、教育博物館からの制作依頼が中止されたという明治16年の2年後、明治18年に、待乳は幻燈機と種板を32、あるいは33セット、教育博物館に納付したと理解が可能である。

一連の「教育博物館年報」には、待乳と鶴淵に幻燈製造を依頼したということに加え、幻燈が配布式から貸出式へと移行したという点、および、明治16年に待乳や鶴淵への制作依頼が終了したという点について、記録が残されていない。今後さらなる調査をおこない、『明治事物起源』の幻燈の項について、事実関係を再検証する必要があるだろう。

教育博物館からの制作依頼が中止されたのち、3年後の明治19(1886)年の6月に、待乳は「改良幻燈會」^{❖33}なるものを鶴淵初蔵とともに開催した。記事によれば、待乳は「水酸瓦斯機械」を発明し、室内で点火し上映をおこなったのだという。「水酸瓦斯機械」とは「酸水素ガス」を指すと考えられ、酸水素ガスの炎によって石灰片を熱し、白熱した石灰から発した光を集め照明に用いた器具を、ライムライトと呼んだ。石油ランプが主流であった中、はるかに明るいライムライトを用いた幻燈器を売り出すことで、他の幻燈機・幻燈製造者との差別化を図ったということであろう。たしかに、先に引用した平木の回想において、当時の「器械は石油を使用して、甚だ簡単なものでした」と述べられている。文部省からの依頼が途絶えたとはいえ、待乳は自ら最先端の技術を習得し、光源の改良をおこない、幻燈事業を軌道に乗せようと幻燈会や広告をいくつも開催・掲載していった。

明治21年頃からは、「幻燈映畫大改良」^{❖34}と題した幻燈種板の広告を新聞に掲載している。広告には、待乳の肩書として「教育博物館御撰用品 幻燈映畫製造所」^{❖35}と書かれている。写真師でありながら幻燈製造もおこなった待乳は、こののち幻燈機だけでなく種板、つまりハードだけでなくソフトの販売に力を入れ、新たな種板を開発するたびに、宣伝をおこなっていくようになる。幻燈の黎明を支えた先駆者であり、文部省御用達であった名声を駆使し、写真師としての力量を示す精緻な写真種板と、妻・園の力を借りた鮮やかな手描き種板、両者の技術を組み合わせ、土産物、報道から教育、滑稽ものまで、幅広い題材を手掛け、幻燈製造所としての地位を築いていった。

次章では、待乳の幻燈製造についておこなった、資料調査の報告をおこなう。実際に待乳と園は、どのように分業・協力し、どのような種板を製造・販売していたのだろうか。現存する資料から、幻燈により生み出されたイメージ群のありようを想像してゆきたい。

3. 現存資料の調査より

本章を執筆するにあたり、早稲田大学坪内博士演劇博物館（以下演劇博物館）所蔵の幻燈種板、早稲田大学・草原真知子教授所蔵の幻燈種板、茨城大学・金子一夫教授所蔵の秋尾園関係資料、一般財

団法人日本カメラ財団（以下JCII）所蔵の幻燈種板、秋尾園幻燈下図、および石黒敬七コレクションのうち中島待乳写真館旧蔵幻燈種板、写真アルバム等の調査をおこなった。ご協力をいただいた諸機関、所蔵者の方々にはこの場を借りて御礼申し上げる。以下では順に、調査概要と主要な資料について、報告をおこなう。

演劇博物館は、3000点を越える幻燈種板を所蔵しており、一部はデジタル・アーカイブとして一般公開されている³⁶。そのうち、鶴淵初蔵製の幻燈器・種板とともに、中島待乳製の幻燈種板の所蔵を確認している【図6-1】【図6-2】。鶴淵製と待乳製の種板は、写真であれ手描きであれ精緻に印刷・彩色されており、さらにイメージを囲う黒地の部分には、金文字で製造者の名前が入り、ほかの種板に比べ高級感が感じられる。幻燈製造の先駆者としての自負とともに、他の製造者たちとの差別化を図り、富裕層に向けて販売をおこなっていたとの推測も可能であろう。

草原真知子教授の所蔵する種板は、演劇博物館所蔵の種板と同様に写真を焼き付けたものに加え、手描きの絵を元にした一連の種板を含む点が特徴である。写真を焼き付けた種板は、彩色の巧拙にバラつきはあるものの、いわゆる横浜写真と同様に土産物として販売されていたと考えられる【図7-1】【図7-2】。さらに、手描きの絵による種板は、啓蒙・教育的手段として制作されたとみられ、「禁酒」が主題とみられる種板がほぼ揃い残る【図8-1】【図8-2】。禁酒をうながすための主題は、いくつものパターンがあり、一連の種板により物語が形成されるというよりは、一枚一枚の絵に内包された意味を説いていく、絵説きのようなかたちで楽しまれたのであろう。同時に、立身出世を遂げた人物の訓話などは、種板に振られた番号順に並べることで、物語が形成される。幻燈は、絵解きや紙芝居などと深い影響関係にあったことがうかがわれる³⁷。

金子一夫教授は、秋尾園の関連資料一式を所蔵されている。関連資料一式には、工部美術学校での画法の教授方法を示すデッサンや、中島待乳写真館における幻燈制作の様子をうかがわせる資料のほか、園の弟、写真師秋尾新六の写真館で使用されていたであろう袋なども含まれている。そのうち、とりわけ興味深い資料について、いくつか特記したい。

【図9】『写真新報』（明治22年）表紙の原画である。『写真新報』自体【図10】にも、本原画にも、画家の名前は記されていないが、秋尾園の手による可能性が高いものと推測される。また、【図11】に見られる待乳写真館の袋や、【図12-1】に示した、薄紙を綴じた幻燈下図の束を確認した。薄紙には幻燈画の枠とみられる丸が記され、はじめの3頁ほどには、丸の中に滑稽物といえるであろう、面白おかしいカリカチュアが描かれている【図12-2】【図12-3】。

また、教訓・説話ものといえるであろう、「伊達騒動」、「赤穂浪士」【図13】などを主題とした下図もあり、これらは後述するJCIIが所蔵する秋尾園幻燈下図と、紙の状態や画のモチーフといった点でよく似ている。くわえて、外国を舞台とする、禁酒を促す物語下図8枚【図14】については、先に述べた草原真知子教授所蔵の禁酒種板と、幻燈上映の目的において共通していると考えられる。各地で

❖36 早稲田大学演劇博物館デジタル・アーカイブ・コレクション 幻燈データベース（暫定版）<http://www.enpaku.waseda.ac.jp/db/epkgentou/>（最終閲覧2016年1月10日）。

❖37 写し絵や幻燈の、絵解きや紙芝居との関連についてはすでに指摘されている。たとえば次の文献を参照。永井啓夫・小沢昭一編『芸双書8 えとく一紙芝居／のぞきからくり／写し絵の世界』（白水社、1982年）。

图 6-1
早稻田大学演劇博物館所蔵種板
(日本東京 中嶋待乳製造)
資料番号: 41501-625_01

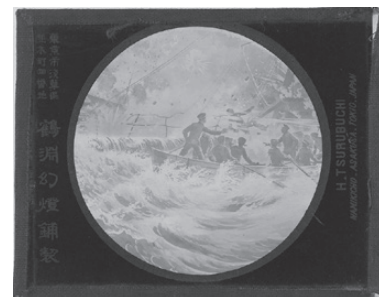


图 6-2
早稻田大学演劇博物館所蔵種板
(東京市浅草区並木町四番地 鶴淵幻燈舗製
「廣瀬中佐の戦死」)
資料番号: 41502-083_01

图 7-1 图 7-2
草原真知子教授所蔵種板
(写真・彩色、中嶋待乳製)
(執筆者撮影)



图 8-1 图 8-2
草原真知子教授所蔵幻燈種板
(絵・彩色、中嶋待乳製)
(執筆者撮影)



图 9
金子一夫教授所蔵『写真新報』表紙原画
(向後恵里子氏撮影)



图 10
『写真新報』第 2 号
(博文堂書店、1889 年) 表紙





图 11
金子一夫教授所藏
待乳写真館袋
(写真師中島待乳 東京日本橋区呉服町 電話本局千五百五十五番)
(向後恵里子氏撮影)



图 12-1 图 12-2 图 12-3
金子一夫教授所藏
幻燈下図・和綴じ束
部分 (向後恵里子氏撮影)

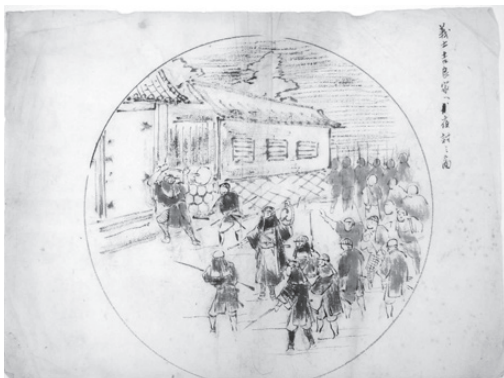


图 13
金子一夫教授所藏
幻燈下図 (赤穂浪士)
(向後恵里子氏撮影)

图 14
金子一夫教授所藏
幻燈下図 (禁酒物語)
(向後恵里子氏撮影)

図 15
金子一夫教授所蔵
幻燈背景下図
(向後恵里子氏撮影)



図 16
石黒敬七氏所蔵
中島待乳幻燈種板
石黒敬章『幕末明治の肖像写真』
(角川学芸出版、2009年) 241頁



開催された幻燈会は、被災地への募金活動や戦中の戦意高揚のほか、慈善活動として婦人会によって主宰されることもあり、その際「禁酒」というテーマが選ばれることがあった。さらに、幻燈機を複数台用いて上映をおこなった際に、背景として用いられたであろう幻燈下図【図 15】も確認している。手前の道の部分に、道行く車や人などが描かれた種板が、重ねて映されたのであろう。

JCII の調査では、写真史家・コレクターである石黒敬七氏によって収集された中島待乳遺品一式と、JCII が所蔵する幻燈種板・下図等を拝見した。今回調査をおこなった資料については【資料 4】、にまとめている。石黒敬七氏が収集した種板は、木箱におさめられており【図 16】、明治天皇・皇后の肖像のほか、名所をうつした写真を焼きつけた土産用の種板や、手描きの絵を元にした立身出世ものの種板がふくまれている。さらに石黒コレクションには、待乳の写真館に残された写真アルバムが揃っており、待乳は自ら撮影した写真のほか、他の写真師が撮影したであろう写真をアルバムにまとめ、イメージのストックから多種多様な幻燈種板を制作していたと考えられる。ただし、今回の調査では、アルバムに収められた写真と、これまでの調査で確認した種板を照らし合わせる、といった作業には至っていない。

おわりに

最後に明治後期の、写真界における幻燈の受容について触れたい。明治 20 年代に至り、待乳や鶴淵の幻燈事業は軌道に乗ったかのように見える。彼らは新聞や雑誌に広告を載せ、また博覧会に幻燈機・種板を出品し、幻燈製造者の先駆者として名を高めていった。同時に明治 20 年代は、『写真新報』や『写真月報』に代表される写真雑誌が刊行され、写真界が活況を呈し始めた時代でもある。写真雑誌

には幻燈の製造法を伝える記事が多く掲載されており、執筆者が調べた限りでは、記事の数は明治 27 (1894) 年頃に増加し、29 年頃までそのピークが続いたといえる。明治 30 (1897) 年頃から記事数は減り始め、徐々に姿を消してゆく。明治 30 年は、日本で初めてヴァイタスコープ、およびシネマトグラフが公開された年であった。

写真雑誌において、幻燈に関する記事が活況を呈した明治 27 年、「日本幻燈会」が設立された。『写真新報』には「日本幻燈会の設立を見る」³⁸と題された記事が掲載され、幹事には技術担当として中島待乳、会計担当として鹿島清兵衛が名前を並べた。また翌年明治 28 (1895) 年 1 月には、盛大に発会式がおこなわれ、その様子は写真雑誌や新聞においても報じられた。³⁹この頃鹿島清兵衛は、明治 28 年に開業した豪華絢爛な写真館「玄鹿館」の経営をはじめ、莫大な財産を背景に、大規模な幻燈会を開催している。「日本幻燈会」の会計担当であった鹿島は、自らの莫大な財産を、その資金源として充当していたのだろう。しかしながら、明治 30 年頃には財産の放蕩が原因で本家から離縁され、その後は没落の途を辿った。

華々しく発会した「日本幻燈会」であったが、鹿島による財政面での後ろ盾をなくした明治 30 年頃から、会の活動は終息していった。同時に、明治 30 年代には写真雑誌上から幻燈に関する記事は少なくなり、写真師たちの幻燈への興味は、失われていったかにみえる。しかしながらこの頃、専門家向けから子供向けまで幅広く、幻燈の製造法を指南する本が多数出版された。明治 32 (1899) 年、博文館から出版された金沢巖『寫眞及幻燈』もその一つであり、その後何十版と板を重ね、大ベストセラーとなったという。⁴⁰幻燈の製造や上映は、写真師といった一握りの技術者の手から、徐々に市井の人々へと広がっていった。こののち安価な幻燈機や、子供向けの簡易幻燈機がさまざまに販売され、種板を手作りすることすら可能になっていったという。

その後、大正 14 (1925) 年の 11 月に、朝日新聞社が主体となり「写真百年祭」という大きなイベントが開催された。このとき待乳は、「東京写真師の最古参として」「老体を押して」昔話をするようになっていたようである。しかしながら、のちに編集された講演録には、待乳の話は掲載されていない【図 17】。⁴¹

待乳とその門下、および妻である園らによっておこなわれていたであろう幻燈制作については、現時点では不明な点が多く残る。待乳写真館の構成人員もはっきりしていない現状においては、写真師であり幻燈製造者であった待乳の姿を追うには、いまだ状況証拠が不足しているといえるだろう。しかしながら本稿で示した資料の存在からは、待乳が自らの写真師としての腕を活かしながら、園の力を借り、幻燈制作をおこなっていたことが想像でき、また、幻燈がその当時人々から親しまれ、非常に身近なメディアであったことも、現存する資料や残された記録により明らかである。今後の課題として、待乳の門下生たちの足跡を追い、待乳写真館の営業状態を明らかにしてゆくことが必要であろう。また、写真がさまざまなメディアに応用されてゆく様子を追い、写真というメディア・言葉が、人々にいかなるイメージを抱かせ、今日に影響を与えているのかをみてゆきたいと思う。

❖38 「日本幻燈会の設立を見る」『写真新報』第 64 号 (写真新報社、1894 年)、256-57 頁。

❖39 「日本幻燈会の発会式」『読売新聞』(明治 28 [1895] 年 1 月 20 日、朝刊) 3 頁。

❖40 金沢巖『寫眞及幻燈』(博文館、1899 年) が版を重ね、写真師から一般の人々にまで広く幻燈の製造法を伝えたという点については、草原真知子教授よりご教示いただいた。

❖41 『写真発明百年祭記念講演集』(朝日新聞社、1926 年)。

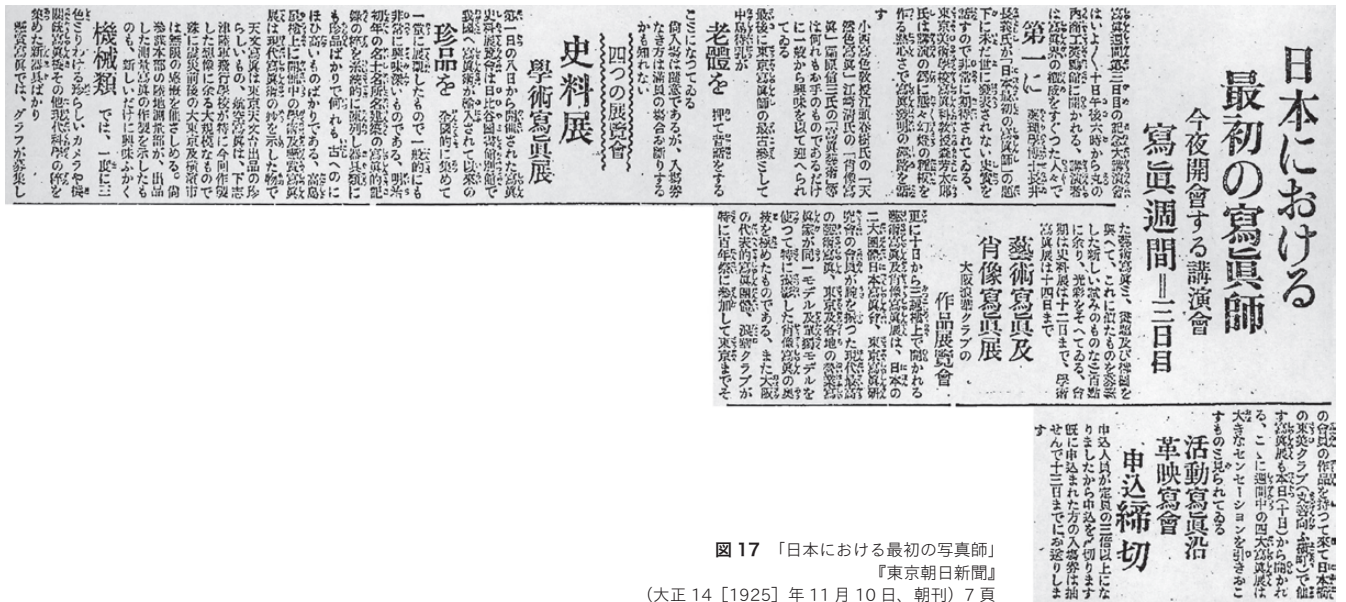


図 17 「日本における最初の写真展」
『東京朝日新聞』
(大正 14 [1925] 年 11 月 10 日、朝刊) 7 頁

【謝辞】

本稿は明治美術学会例会（2015年11月7日）の発表をもとに、加筆・修正をおこなったものである。調査にあたっては、金子一夫教授、草原真知子教授、一般財団法人日本カメラ財団の田村昌彦氏、櫻井由理氏、日本カメラ博物館の井根直美氏に格別のご支援を賜った。また、待乳墓碑銘の解読にあたっては、青木茂氏、杉江京子氏に多大なるご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

ナク研究ノ歩ヲ進ムル事最モ困難ナリシト云フ
明治初年王政維新ノ偉業其緒ニ就キ歐
米ノ文化一時輸入セラレテ社會ノ狀態ニ大變
化ヲ來シ急轉直下舊態ヲ打破スルノ秋ニ當
リ江戸ニ於テモ写真ヲ營業トスルモノアルニ至
レリ彼ハ此時吉原ニ於テ自己製造機械
器具ヲ以テ試験的撮影ヲ開始シタルニ成績頗
良好ニシテ相應ノ華客ヲ得事業發展ノ
曙光ヲ見ルニ至レリ然ルニ不幸全年十月近
隣ニ火ヲ失シ延焼ノ禍ニ罹リ多年ノ困苦ニ
成レル機械器具ノ全部ヲ焼失シ事業ノ
發展ニ一頓挫ヲ來セリ
明治五年新宿竹川町玉屋ニ於テ鏡玉及写真
機ノ製造ヲ為ス傍ラ写真撮影ヲ為ス全年二
月再ヒ大火ニ罹リ玉屋ト共ニ芝区日蔭町ニ移轉
シ事業ヲ繼續ス
明治七年春吾妻橋畔材木町ニ開店ス當時ノ
顧客ハ主ニ大学南校生慶應義塾ノ學生
ニシテ顧客中外國ノ作品ヲ所持スル者アリ彼
レハ是等ノ材料ヲ得テ本邦作品トノ比較ヲ
為スニ其及ハサルヲ遠キヲ想ヒ種子板ノ手入
光線ノ作用等ニ工風ヲ擬ラシ稍々改良ノ曙
光ヲ認メタルモ尚外國品ノ優秀ナルニ及ハス益
々比較研究ニ腐心スル内大學履教師獨乙
人「デーニッチ」氏ノ愛顧ヲ受ルニ至リ同氏ガ獨
乙ニテ撮影シタル種子板三枚ヲ持參シ之ガ燒
iv

ナル便益ヲ得タリ
後同氏ニ請フテ其一枚ヲ懇望シ之ヲ材料トシテ
各種ノ研究試験ヲ累ネ終ニ大ニ得ル処アリ外國
品ト同一ノ印画ヲ得ルニ至レリ僅ニ一枚ノ種板ト雖
モ研究ノ結果技術ノ進歩ニ及ホシタル影響實
ニ大ナルモノアリ
之ガ為メ写真修整上發達ノ一時期ヲ劃シタルモ
ノト云フヲ得ベシ
明治十年西南戦争ノ結果一般ノ顧客ヲ増シ
事業益々繁榮ニ趣キ第一回内國勸業博
覽會ニ人像印画ノ修整ヲ加ヘタルモノト修整
セサルモノトノ比較作品ヲ出品シテ花紋賞牌
ヲ受ク
明治十一年印刷局ニ於テ写真撮影ヲ始メ普
通價格ノ半額ヲ以テ撮影セシガ為メ大打撃
ヲ蒙リ殆ント營業休止ノ悲境ニ陥リタルモ
克ク之ニ耐ヘ此時機ヲ利用シテ幻燈機械ノ
製造工風ニ着手シ外國品ニ劣ラサル優良
品ヲ發明セント苦心研究セリ
明治十四年ニ至リ印刷局ノ写真業廢止ト共
ニ營業再ヒ舊ニ復シ繁盛ヲ見ルニ至レリ
此年第二回内國勸業博覽會ニ墨汁印画
ヲ出品シ有効賞牌ヲ受ク墨汁印画ハ幾百
年ヲ経ルモ変色セサル特色ヲ有スルモノニテ
當時此印画ヲ製出スルモノナカリシト云フ
v
總テ写真ハ化学的薬力ニ依リ映スルモノナルニ此ノ
製法ハ染料ヲ加味セル化学的作用ニ類レシモノ

薬力相互ノ互消ニ因リテ全ク薬力ヲ失ヒ染料ノ
ミ殘留スルモノナレバ写真機械ノ緻密ナル作用ヲ藉
テ染料手画セシト同一ノ働キアル一種巧妙ノ技術
ナリ蓋シ之ノ製法ハ彼レノ創作シタルモノニ非
スト雖トモ當時ノ日本ニ於テ之ヲ傳習スルノ先師
ナク唯僅ニ外國ノ作品ヲ視テ之ト同一物ヲ製造
セントスルハ其苦心ノ度ニ於テ全ク創作ト撰フ処
ナシ此ノ点ニ於ケル彼レノ熱心研究ノ効偉ナリ
ト云フ可シ
明治十五年文部省ヨリ幻燈映画ノ製造ヲ命セ
ラル當時御用品ノ種類ハ天文、動物、生理ノ三種
ニ止マリシガ彼レハ此ノ範圍ヲ擴張シテ倫理、宗教
教育（中学程度ニ適應スルモノ）、衛星、植物等ニ應用シ
殊ニ顕微鏡ヲ映画ニ應用セシガ為メ顕象數萬
倍若クハ數十萬倍ニ擴大シ多數人同時ニ視察
研究スルノ便益ヲ得教育上並ニ衛生上其功績
最モ顯著ナルモノアリ
明治十七年文部省ノ許可ヲ得テ御用幻燈映
画ノ賣捌ヲ為ス
同年帝国大学ニ於テ大学履教師英國人
「バルトン」氏專ラ主任トナリ幻燈機械ノ實驗
ヲ為シ傍ニ學生ニ解説シテ教育上ノ參考ニ
供シタルニ頗ル好成绩ナルヲ認メラレタリ
明治十八年幻燈映画一式ヲ文部省ニ獻納ス
vi
全十九年頃ヨリ欧米諸國殊ニ英米兩國ヨリ幻
燈機械及映画ノ製造ヲ依頼シ來ルモノ多シ之
レ本邦製品ガ欧米ノ製品ニ比シ價格ノ低廉ナルト

【資料1】東京都公文書館所蔵中島精一経歴

『大正元年 文書類纂 褒賞』

※『文書類纂』内、待乳の項目には、次の四種類の経歴が掲載されている。
本論ではこのうち、③を翻刻した。
※翻刻に付記したローマ数字は、執筆者が付した頁数である。
※本文中□で示した部分は、解読不可の文字である。

- ① 東京府知事・阿部浩から官房主任・岡田有邦宛て
- ② 警視總監・安楽兼道より東京府知事・阿部浩宛て
- ③ 東京市日本橋区長・大庭知栄から東京府知事・阿部浩宛て
- ④ 官房主任・岡田有邦宛て「経歴書」

i

調書

東京市日本橋区呉服町壹番地

戸主平民 中島精一

事蹟

中島精一 號待乳嘉永六丑年四月十四日千
葉縣□□□□□□□□ニ生ル資性穎
悟意思強健寡黙ニシテ幼ヨリ美術ニ志アリ
頗ル繪画ヲ好ム文久年間和蘭船ノ漂着
ニ會シ乗組員ノ所持スル懷中時計ニ写真
ノ附着スルヲ視テ之ヲ繪画ト信シ其技ノ巧妙
ナルニ驚嘆シ茲ニ美術家タラントスル志望ヲ
決スルノ動機ヲ得タリ時ニ齡僅二十三歳ノ少
年ナリシナリ

元治元年十五歳ニシテ父ニ從ヒ江戸ニ出ツ父ハ
之ヲ商人タラシメントシ相当ノ商家ニ丁稚奉公
ヲナサシメントスルノ意アルモ美術家トシテ世ニ立タ
ントスル志望熱烈ナル彼ハ父ノ命ニ從ヒ商家
ニ入ルヲ好マス希望ノ業ニ従事セントスルノ念甚タ
功ナルヲ以テ父ハ止ムナク一旦彼ヲ伴フテ帰国スル
トナレリ
翌慶應三年南画ノ名匠中林湘雲銚子町
ニ来ルニ會ス氏ハ南画ノ泰斗ニシテ名聲四方
ニ噴々タルノ人ナリ彼レハ好機到レリトナシ之ニ師
事セントヲ請ヒ容レラレテ其弟子トナリ専ラ繪画
ヲ研究スルトナリ茲ニ志望ノ一端ヲ達スルトヲ

ii

得タリ

全年二月湘雲二伴ハレテ再ヒ江戸ニ出テ専心
繪画ヲ研究ス
繪画研究ノ歩ヲ進ムルニ從ヒ先年和蘭人ヨリ
示サレタル時計蓋ノ像ハ繪画ニアラスシテ写真
ナリシ事ヲ知り茲ニ始テ写真術ヲ研究セン志望
ヲ起シタルモ當時未タ江戸市中ニ写真ヲ業トスル
モノナク其技ヲ習得スルノ途ナキニ苦ミツ、アル内偶
々某氏ノ談ニ依リ漢譯ノ写真書アルヲ聞キ苦
辛搜索ノ末日本橋本町瑞穂屋清水商店ニテ
一書ヲ得且ツ清水氏ノ紹介ヲ以テ福地源一郎
先生ニ師事シ漢譯写真書ノ解釋シ聞キ
傍ラ博識ナル先生ノ指導啓蒙ニ依リ写真
術研究ニ一道ノ光明ヲ得テ益々研学ノ志望
ヲ堅實ニスルトナレリ
當時福地先生ノ注意ニ依リ写真術ハ学問
的研究ノ外尚ホ機械器具ノ製作ニ留意セ
サルヘカラス其主要ナルモノハ硝子凹凸鏡ノ製造
ニアリト聞キ當時此營業ニテ有名ナル京橋竹
川町玉屋松五郎ニ就キ鏡玉研磨ノ術ヲ練
習ス
彼ハ此數年間苦辛研究ノ結果漸ク写真
及鏡玉ノ術ニ熟達シ試写ニ依リテ技術ノ実
驗ヲ為サント欲スルモ一般人ハ未タ写真ノ何物タ
ルヲ解セス人ノ像ヲ撮影スル時ハ其人短命ナリ
等ノ愚昧ナル迷信ヲ有シ容易ニ應スル者

iii

養ヲ怠ラス毎月数回同好ノ士（徳川候、稲葉子爵等家族其
他ノ諸士）数十名相合シテ静座練心ノ術ヲ講シ其指導
ヲ為シ居レリト云フ

人彼ヲ評シテ戒律僧ノ如シト云フ又所以ナキニアラス
彼レノ人ヲ待ツ最モ寛怒ニシテ家人ニ對スル尤モ最
肅ナレトモ亦尤モ慈愛深ク温容以テ之ヲ統フルカ故
ニ二十有餘名ノ一家和氣ニ充テ整然トシテ秩序アル
家庭ヲ為セリ之レ蓋シ彼カ堅固ナル修養ノ徳ニ感
化セラル、モノト云フヲ得ベシ

現ニ客宮殿下徳川公其他ノ貴顯紳士ヨリ業務
以外ニ親近セラル、ヨリ見ルモ彼レガ志行ノ卓越
ナルヲ

証スルニ足ラン
亦藝術ニ對シテ熱心勤勉ナルヲ殆ント他ニ比類
ヲ見サル処ニシテ四十有餘年ノ間終始一貫研究練
磨シ幾多ノ困難ニ遭遇スルモ充ク之ニ耐ヘ不撓
不屈ノ精神ヲ以テ能ク今日アルヲ致シタル事何人
ト雖トモ歎賞セサルモノナシト云フ

土地家屋船舶ノ有無
本区公簿上土地船舶ナシ
家屋土蔵二階建其他ニテ六棟所有

x

刑罰

刑罰ヲ受ケタル事ナシ

比較的製品ノ良好ナルトニ依ルモノニシテ今日ニ於テモ絶ヘス製作注文ニ接シ居レリ

元來幻燈機械ハ始メ外国品ヲ模造シタルモノニテ原製品ハ非常ノ高價ヲ以テ輸入セラレタルモノナリ然ルニ近年苦心研究ノ結果現今ニ於テハ外国作品ニ劣ラサル優良品ヲ製出シ得ルニ至リ英米ノ先進國ヨリ本邦製品ヲ購買スルニ至ル之ガ為メ多額ノ輸入ヲ防遏シ却テ本邦製品ノ輸出ヲ為スニ至ルノ事實ハ國家ノ為メ大ニ慶スヘキ事ナリトス此レ蓋シ彼一人ノ功績ニアラスト雖トモ本邦ニ於ケル最先ノ研究者ニシテ亦之ヲ寛政シタル者トシテ彼レノ功績實ニ著大ナルモノアリ

明治二十年幻燈使用ヲ全國ニ普及セシムルヲ其効用ヲ完カラシムルノ目的ヲ以テ店員ヲ各府縣ニ派遣シ現物ヲ提示シ映画ヲ解説シテ其有効ナル所以ヲ勸説セリ當時未タ交通ノ便開ケス都鄙文明ノ懸隔甚シク文部當局ニ於テモ幻燈使用ヲ勸誘スルニ努メタルモ遠隔僻陬ノ地ニ在リテハ實物ヲ見ルノ便宜ナク遺憾少ナカラサリシカ此店員派遣ノ擧ニ依リテ幻燈使用ノ効果一般ニ証認セラレ教育上及衛生上貢獻スル処尠ナカラサリシ

vii
明治二十一年幻燈ニ改良ヲ加ヘ暗室ナラサルモ映出シ得ヘキ光力ノ増進ヲ図リ安全酸素瓦斯ヲ使用シ鮮明ヲ加ヘ映画ヲ擴大シテ直径二丈ニ及ハセタリ此工風発見ニ依リ幻燈ノ一變タル

暗室映画ヲ要セサルニ至リシハ實ニ幻燈界ノ於ケル一大進歩ニシテ其功績大ナリト謂フヘシ同年改良幻燈ヲ公示スル目的ヲ以テ會員ヲ募リ改良幻燈會ヲ興シ各所ニ開會シテ之ガ普及ヲ図レリ

同二十三年第三回内國勸業博覽會ニ安全瓦斯幻燈ヲ出品シテ有効賞牌ヲ受領ス
幻燈映画ノ教育上衛生上、學術上ニ及ホス効力ノ偉大ナル事既ニ世上一般ノ公認スル事實ニシテ彼レハ明治十一年以來幻燈機械及映画ノ製造研究ニ従事シ幾多ノ辛酸ヲ嘗メ利慾ヲ度外ニ措キ専ラ公益ヲ重スルノ本旨ニヨリ苦辛研究ノ結果終ニ外國製品ニ劣ラサル優良品ヲ製造スルニ至レリ斯ノ如ク幻燈ノ製造及其普及事業ニ盡瘁シタル点ニ付テハ文部省ニ於テモ其功績ヲ証認セラル、処ナラント信ス

明治二十五年写真協和會設立ニ際シ其発記者トナリ全三十年大日本写真協會技藝長トナル
全四十年大日本写真會設立ニ當リ其評議員トナル
全年第六回東京府勸業博覽會ニ於テ印画及写真ノ審査員ヲ囑託セラル

viii
同四十三年東京写真師組合顧問ニ推薦セラル
特ニ最モ光榮トスル処ハ故小松宮殿下故北白川宮殿下其他ノ宮殿下及徳川慶喜公德川篤敬候等貴顯ノ親任ヲ蒙リ御用命ヲ蒙ルハ勿論写真術ノ御教授申上ケタル事ナリト云フ

賞状賞牌木杯等ヲ受ケタルモノヲ
挙クレハ左ノ如シ

明治十年第一回内國勸業博覽會ヨリ花紋賞牌ヲ受領

同十四年第二回内國勸業博覽會ヨリ有効賞牌ヲ受領ス

同二十三年第三回内國勸業博覽會ヨリ有効賞牌ヲ受領ス

同二十八年日清戰役ノ際物品寄附ニヨリ賞状木杯一個下賜

同三十一年東京商業會議所ヨリ木杯一個ヲ贈ラル

同三十五年常盤小学校ヘ物品寄附ニ付府知事ヨリ賞状木杯一個受領

同四十年大日本写真會ヨリ木杯一個ヲ受領

同三十九年日露戰役ニ物品寄附ノ為メ賞状木杯一個下賜

同四十一年北白川宮成久親王殿下御結婚ニ際シ木杯一個下賜

同四十年東京府勸業博覽會ヨリ銀盃一個受領

ix
平素ノ志行
資性温厚篤實平素ノ志行円満ニシテ圭角ナリ衆人ノ敬愛スル処トナル青年時代ヨリ故山岡鉄舟先生及福地源一郎先生等ニ就キ學術ノ研究精神ノ修養ヲ積ミ道念頗ル堅固ニシテ超脱ノ誉高ク同業者間稀ニ視ルノ徳操家タリ現ニ自己獨特ノ修養法(静座法若クハ感應術)ニ基キ精神ノ鍛練修

田中隅田	浅井藏之助
田和峯次郎	野島隆次
田邊君太郎	宇田川忠義
山岸彦三郎	麻生嘉一
成瀬啓次郎	森金鼎一
中島さと	羽崎一夫
宮内さえ	三宅貞輔
山岡松子	佐藤里次
佐藤福待	桑子經次
坂根勝一	丸山藤市
橋本良知	井岸泰勝
中坪政衛	鈴木定次
黒田光子	多田源亮
秋尾新六	多田經次
秋尾勢以	筒井守藏

【資料2】中島翁紀功碑

※本文中□で囲んだ文字は、判読が困難なため検討の余地が残る。

【墓碑銘表】

中島翁紀功碑 正三位勲一等鈴木喜三郎題額

翁名精一幼字助次郎號待乳中島氏下綵銚子人以照像之技鳴于海内翁幼而巧智所見輒摸倣莫不逼似一日見外舶所齎照像驚其精巧奮然興研究之志時文久二年甫十三父欲其專力謀之於師師勛以精神宜一遂以命名慶應元年年十六遊學江都江都通照像技者綦稀亦無足就學者乃繙閱漢人譯書孳

研磨終能精通尋圖制照像器拮据閱年而成既而覺有修正術刻苦鑽究乃得明治戊辰也更研究採光法發見片光

線式施以修正自是照益精西人見之感歎不措後又修造幻燈並顯微影畫巧緻入神當是時翁之名聲藉甚慕其名學其術者與

四方求照相者陸續相踵門常成市王公貴人延聘優遇東京府表彰獎賞日本寫真協會推為藝術長日本全國聯合寫真

師組合推顧問前後公私所受賞牌凡十有餘同業仰為奉斗翁為人謹厚舉止端嚴不喜戲娛不貧午睡其誨弟子循誘掖

頗有君子之風配秋尾氏名園子負泳有內助之功翁初寓淺草材木街街臨墨江對待乳山風光明媚取以為號移遷日本橋吳

服街現居牛籠辨天坊信奉法華宗遺外世事優遊以樂行年七十有九簞樂如壯者云頃門人胥謀欲樹碑以勒其

功屬余記之余謂文久慶應之際照像幻燈影畫之技與器未大傳皇國翁能率先研究內以廣其傳外以防其舶齋

以開今日之成其功固不可不傳而門人等之能思師功不謬師恩以圖不朽之其忠厚之情可以諷薄俗而砥頹風此亦不可

沒於是手記

昭和三年十月

正五位勲六等細田謙撰

二松学舎教授佐倉孫三書

【墓碑銘裏】

門人一同

山本讚七郎

小泉道太郎

宮内幸太郎

中島岩次郎

小菅仲

浅井其三郎

水野角藏

岡靖一

【資料 3】中島待乳年表

年	中島待乳年表	関連事項
嘉永元年 (1847) 頃	千葉県銚子に生まれる。本名精一。	
文久年間 (1861-64)	オランダ船が漂着した際に、乗組員が持つ懐中時計に貼りこまれた写真を絵画と間違え、画家を志す。	下岡蓮杖が横浜で、上野彦馬が長崎で写真館を開業する。
元治元年 (1864)	丁稚奉公をさせようと考えた父に連れられ、一度江戸に出るも、千葉へ戻る。	
慶應 3 年 (1867)	南画家中林湘雲の弟子になる。湘雲とともに江戸に出る。	
	日本橋町の瑞穂屋清水卯三郎に漢訳の写真書を融通してもらい、福地源一郎を紹介され、漢訳写真書を翻訳してもらい、またレンズ製造法について教示される。京橋竹川町の玉屋松五郎に就いてレンズの研磨術を学ぶ。	
明治戊辰 (1868-69)	写真師に就いて学ぶ。(横山松三郎か?)	横山松三郎、横浜で写真館を開業。
明治 5 年 (1872)	身を寄せていた玉屋松五郎宅が大火に遭う。玉屋とともに芝区日蔭町に移転。	
明治 6 年 (1873)	玉屋松五郎没。	
明治 7 年 (1874)	浅草吾妻橋畔材木町に写真館を開業。	北庭筑波・深沢要橘、日本初の写真雑誌『脱影夜話』刊行。
明治 10 年 (1877)	第一回内国勸業博覧会に出品、花紋賞牌を受領。	8月18日、上野に教育博物館開館。8月21日から上野にて第一回内国勸業博覧会開催。
明治 11 年 (1878)	この頃、幻燈製造はじめる? 秋尾園と結婚か。	大蔵省印刷局、写真事業開始。
明治 13 年 (1880)	文部省、鶴淵初蔵と中島待乳に幻燈機・種板の製造を命じる。	
明治 14 年 (1881)	第二回内国勸業博覧会に出品、有功三等賞牌を受領。	第二回内国勸業博覧会開催。
明治 16 年 (1883)	教育博物館、経費の欠乏により幻燈頒布を止める。配布式から貸出式へ移行。同時に待乳・鶴淵への委託制作中止。	
明治 19 年 (1886)	待乳が考案した改良幻燈の幻燈会開催。好評を博す。	鶴淵幻燈舗、解説書『幻燈図解』刊行開始。
明治 23 年 (1890)	第三回内国勸業博覧会に出品、有功三等賞牌を受領。	第三回内国勸業博覧会開催。
明治 27 年 (1894)	日本橋区呉服町一番地に移転。大日本写真品評会評議員を務める。	巖谷小波『幻燈會』(大橋新太郎編『幼年玉手函』第四編、博文館) 刊行。
明治 32 年 (1899)		金沢巖『寫眞及幻燈』(博文館) 刊行。
明治 34 年 (1901)		石井研堂『理科十二ヶ月 第十一月 幻燈會』(博文館) 刊行。
明治 40 年 (1907)	大日本写真会設立、評議員を務める。東京勸業博覧会囑託審査員を務める。	東京勸業博覧会開催。
...		
大正 14 年 (1925)	写真百年祭にて講演か?	
...		
昭和 13 年 (1938)	逝去。	

【図 4】 JCII 所蔵、中島待乳関連資料 ※本文中□で示した部分は、解説が困難であった文字である。

	品名	箱書き、 コレクション整理用 メモなど	備考 1	備考 2
1	幻燈機一台		「UNIS FRANCE」のロゴ。持ち運び用の 金属の箱に収納。	
2	ステレオ写真一箱	96 枚	「東京諸景」の箱書き。	
3	ステレオ写真バラ 10 枚			
4	幻燈種板		木箱内に 6 つの小さな木箱+バラの種板 数枚が収納。 すべてガラス板の四辺を、布やマスキ ングテープで固定。木枠なし。6 箱にそれ ぞれ 15 枚程度収納=総数 80 枚程度か。 備考 2 に 6 箱それぞれの主な内容を記す。	①日露戦争：絵・写真、彩色 ②日露戦争：絵、彩色 ③陸海軍肖像：写真、彩色 ④カリカチュア、 顕微鏡を覗いたような図、 教育勅語図解など：絵、彩色 ⑤教育的內容 (少年立志美談、 教育勅語図解など) ：絵、彩色 ⑥名所、風俗、民俗 ：写真、彩色
5	幻燈種板	サイズ 6×6、 8×8 の二種類	木箱内に種板を二列に並べ収納。上記と 同様のシリーズも有り。 手書きの絵に彩色がほとんどこされたもの多 数。100 枚程度か。	
6	木枠付き幻燈種板		他の種板と異なり、横長の重厚な木枠（マ ホガニーか）で固定された種板。 数字が振られた動物シリーズ（絵、彩色） が 9 枚、番号のない自然現象シリーズ（絵、 彩色）が 2 枚。 備考 2 に各種板のタイトルを写す。	第一 猩々 黒猩 猿猴 第四 鼬鼠 □鼠 水獺 第五 獅 虎 猫 第八 熊 罴 第十 栗鼠 野兎 火鼠 海狸 モンガ 第十二 象 第十五 駱駝 第十七 麒麟 綿羊 第十九 臘肭獸 海象 海豹 バラ 1 大雨+気球 バラ 2 虹
7	秋尾園幻燈種板下図 + 待乳製幻燈種板	下図 96 枚	下図（95 枚）とともに、京都府博覧会で 受賞した褒状（賞状）、男性の集合写真（中 島待乳写真館撮影）が含まれる。 下図は厚紙に薄紙を貼り付け、墨で描か れる。ハイライトや修正箇所を白く塗る。 歴史や神話に基づく、教育的な内容の画 多数。金子一夫教授所蔵の下図とよく似 ている。	待乳製幻燈種板数枚、風景・ 名所、彩色 ガラス板にマスキングテープ、 木枠なし。中島待乳写真館の名 前が、ガラス板に焼き付けられ ている。
	中島待乳旧蔵アルバム (い)～(ち)まで 8 冊 のアルバムが残る。待乳 写真館で使用された写 真台帳とされ、待乳以外 の写真師による写真も含 まれる。	(い) 中島待乳風俗写真アルバム (名刺大 261 枚)		
(ろ) 中島待乳東京風景アルバム (手札大・横浜写真 169 枚)				
(は) 中島待乳元勲・朝鮮・日露戦争と軍艦・三陸被害写真ア ルバム (名刺大、三陸のみ手札大。人物 26、朝鮮 32、日露 76、 三陸 48、計 184)		キヨッソーネによる御真影のほ か、日露戦争関係の絵を複写し た写真など。		
(に) 中島待乳世界各国名所風景アルバム (名刺大 213 枚)				
(ほ) 中島待乳世界各国名所風景アルバム (名刺大 331 枚)				
(へ) 中島待乳世界各国名所風景アルバム (名刺大 445 枚)				
(と) 中島待乳日本各地風景アルバム (名刺大 288 枚)				
(ち) 中島待乳世界各国名所風景アルバム (名刺大 423 枚)				

* 品名、備考は執筆者による。